

日本を代表する詩人の一人・吉増剛造さん(83)が、友人で「前衛映画のゴッドファーザー」と評された米映像作家のジョナス・メカス(1922～2019年)の足跡をたどる旅が続けている。戦争や政治の混乱で心が行き場を失いがちな今、難民生活の経験が根底にあるメカスの作品に向き合うことに意義があるのだという。その旅路を撮ったドキュメンタリー映画「眩暈 VE RTIGO」(井上春生監督)が、来月公開される。(林啓太)

米映像作家

メカスの足跡 フィルムでたどる



ジョナス・メカス リトアニア生まれ。渡米後はハリウッド映画と一線を画した表現を目指し、映像の制作や評論で前衛映画界を主導。米画家アンディ・ウォーホルらポップアートの旗手とも交流した。2019年没。主な映像作品は「リトアニアへの旅の追憶」「私は前に進んでいるときわずかに美しさのかけらを見るがあった」など。

詩人・吉増剛造さんとの交流の記憶
ドキュメンタリー映画 来月公開

リトアニア出身のメカスは第二次大戦のころ、祖国を占領したナチスドイツを批判する地下新聞の編集に加わった。捕まって強制収容所に入れられたが脱走し、欧州内の難民収容所などを転々とした。ソ連の指導者スターリンを批判したため、戦後

にソ連に組み込まれた祖国にも戻らず、一九四九年に移民として米国に渡った。「眩暈」の主な場面は、メカスの死去から一年後の二〇二〇年一月に米国で撮った。同作で吉増さんは、ニューヨーク市内を流れる川の船上で街の夜景を

眺める。移民として初めて見た米国の景色が同じニューヨークの夜景だったメカスに思いをはせ、「こつこつとやうく」「荒廃した欧州からここに来た時の、メカスさんの身体の底から傷だらけになるような苦しい状態の幻が見えるような気がする」

七〇年代からメカスの映像の世界観に引かれてきた吉増さんは八五年に初めて本人と会った。渡米するたびに会い、交流を深めた。

メカスは、身辺の出来事を撮る「日記映画」という手法で知られる。吉増さんは、その作品には主張や思想を表現する「物語」はなく、「昆虫のわずかな目の動きのような視線がある」と説く。「心の震えが伝わってくる。難民生活の苦しい震えと重なっている」

戦後の詩壇を引っ張り、谷川俊太郎さんと並び称されてきた吉増さんも、詩作の姿勢にはメカスに似通ったところがあるという。

「僕も弱虫で神経質。一步引いて、大事なものをつかもつとするタイプ」。背景には、住み慣れた東京から追われるように今の和歌山市の郊外に疎開し、「空襲で市中心部が燃えるさま」を目撃した戦中の体験があると自覚している。前後の思い出を「傷ついた記憶のフィルム」と呼ぶ。

メカスとの交流であらためて確認したのは、「芸術行為は『わたし』が主役ではない」とだと言った。「日々の自分でも気付かないふっとしたしぐさをつかまえる。詩はそうした身ぶりの中から立ち現れてくる」

今、世界の少なからぬ国々が愛国心で国民を戦争や軍拡に駆り立て、市民の権利を抑圧している。これに対して、反戦や平和、さまざまな人権の保護を訴える人々の運動も盛んだ。

吉増さんは、メカスが愛国心や反戦平和などの「大きな物語」から、距離を置いてきたとみる。「仮にウクライナの戦争に直面しても、おそろしく沈黙したのでは、想像を巡らせる。だからといって、メカスが世界の片隅の人々の苦しみに冷淡であったとはみていない。メカスが人間には「楽園の断片」を心の中で育てる力があると指摘したことを挙げ、「昆虫のように希望も絶望もせずにじっと待つ。そんな映像作品を見ると、苦しみに直面した人々でも何かほどこる感じがするはず」。詩人として自身が目指すべき場所も、メカスが歩んできた道の先にあると、信じている。

映画は十二月十三日から、東京都写真美術館を皮切りに各地で公開予定。